うちの近所

コレイチ

わが町 自慢紹介 82

ハッピー はびきの ハピバール
〝なんだか笑顔になるように〟

国道170号・外環状線「西浦南」交差点の西側、西浦小学校の向かいに三角屋根の素敵なカフェがあります。HBのロゴマークもおしゃれな「ハピバール」。お昼時にはランチを楽しむカップルや家族連れがやってきます。併設された工房からは楽しそうな笑い声が聞こえています。

ここは、「なんだか笑顔になるように」をコンセプトに、社会福祉法人ふたかみ福祉会が運営する障害者の生活介護と就労継続支援B型の事業所なのです。

三角屋根のすてきな外観

重い障害があってもこの街で暮らしたい

ふたかみ福祉会の出発点は、「どんな重い障害があってもこの街で暮らしたい」という思いをかなえるため、1989年に開所した共同作業所・羽曳野園。現在、グループホーム、放課後デイサービス、相談支援事業所などを含めて5施設を運営し、利用者100人以上、職員40人を数える法人となりました。

まもなく開設3周年を迎える「ハピバール」は、こうした事業所と地域住民をつなぐ窓口です。同時に地域の人たちが気軽に集い、利用者とふれあう交流の場となっています。

羽曳野に来たらぜひ寄ってほしいですね。

「ハピバール」の仲間たち

Culture Navi かるちゃーなび

作りませんか 給食の人気メニュー

すき焼き

交野市職労　国武　裕次さん

協力：現業評議会・給食部会

具材たっぷり！ボリューム満点！
ごちそうの王様!!

材料（4人分）

牛肉80g、豆腐160g、糸こんにゃく80g、たまねぎ120g、白菜160g、しめじ40g、しろねぎ20g、春菊20g、塩0.8g、水80g
〈調味料〉酒4g、砂糖16g、濃口醤油24g、菜種油0.8g

作り方

①豆腐はボイルしておく。
②糸こんにゃくは50ミリ幅に、たまねぎは6ミリ幅に、白菜と春菊は12ミリ幅に切り、しろねぎは3ミリ幅の小口切りに、しめじは根元を落としてほぐす。
③油を熱し、牛肉を入れて炒め、塩を加えさらに炒める。
④たまねぎを入れ軽く炒め、水を加え煮る。
⑤糸こんにゃく・しめじ・白菜・下ゆでした豆腐を加えて煮込む。
⑥調味料を加えて味を整える。
⑦しろねぎ・春菊を加えて仕上げる。

☆みんなでワイワイと鍋を囲んでみてはいかがですか。なんだか、とってもうれしい気分に♪

このシネマがえいが

「彼が愛したケーキ職人」

〝同じ男性〟を愛した男女ふたりが紡ぎだす切なくも美しい物語

主人公は、ベルリンのカフェでケーキ職人として働くトーマス。彼には、月に一度イスラエルから出張でやってくるオーレンという男性の恋人がいます。ふたりはオーレンがベルリンに滞在する間だけ愛し合う関係でしたが、ある日オーレンからの連絡が途絶えてしまいます。トーマスは必死で連絡を取ろうとしますが、実は、オーレンは交通事故で亡くなっていました。一方、オーレンの妻アナトは、夫が亡き後、イスラエルで一人息子を育てながら休業中のカフェを再開させていました。恋人の影を求めてイスラエルにやってきたトーマスがそのカフェに客として現れ、子育てとカフェの営業で大忙しのアナトはトーマスを雇うことに…。同じ男性を愛し、同じく最愛の人を失った男女の出会いと気持ちの動きを繊細なタッチで描いていきます。

トーマスがケーキづくりをする過程でぶつかる「コシェル」（食べ物に関するユダヤ教の厳しい戒律）の壁、それは二人が住む世界の違いを露（あらわ）にし、ホロコーストの加害者と犠牲者という微妙な立場も二人の関係に影を落とします。周囲の人たちと対立しながら、二人はお互いにひかれあう。国籍や歴史、文化、宗教の違い、性別すら超越して生きること、愛することの素晴らしさを見出すでしょう。

イスラエルの若手監督オフィル・ラウル・グレイツァの作品で、イスラエルとドイツ合作です。宗教的戒律の厳しいイスラエルでこんなLGBTの映画が作られたのも驚きです。

心に響くこのひとこと

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。
（「私と小鳥と鈴と」より）
金子　みすゞ（1903年~1930年）

大正末期から昭和初期にかけて活躍した童謡詩人。山口県生まれ。10代半ばから詩を作り、下関市に移り住んだ20歳ごろから雑誌に詩を投稿するようになります。26歳で自ら命を絶ちました。代表作は「私と小鳥と鈴と」「大漁」「星とたんぽぽ」など。自然とともに生き、小さな命を慈しむ思い、命なきものへの優しいまなざしが、金子みすゞの詩集の原点と言われています。「みんなちがって、みんないい」。本当は当たり前のことなのに、一つの基準で全ての価値を決めてしまいがちな現代において、この言葉は人々の心に鋭く優しく響きます。

今月の記念日

テレビ放送記念日
2月1日

1953年2月1日、NHKによる日本で初めてテレビ放送が行われました。放送は午後2時から約4時間行われ、菊五郎劇団による舞台劇「道行初音旅」が中継されました。この時、テレビカメラはわずか5台しかなく、本放送開始当日の受信契約数は866件、都内の契約が664件、そのうち482件がアマチュアの自作受像機によるものです。当時、サラリーマンの平均的な給料が約1万5000円程度だったのに対して、テレビの受像機は約20万円ととても高価でした。このためデパート、駅、公園などに設置された「街頭テレビ」で放送されるプロ野球、プロボクシング、大相撲などに国民は「眼でみるラジオ」と熱狂していたとのことです。